

夜間診療実習の評価と今後の教育方法の検討

登内 芳子・所澤 好美・岩月すみ江

武分 祥子・杉山恵美子

Evaluation of Outpatient Nursing Practice at Nighttime and Examination of Future Education Method

Yoshiko TONOUCHI, Yoshimi SHOZAWA, Sumie IWATSUKI,
Sachiko TAKEBU and Emiko SUGIYAMA

要旨：本研究では、成人看護学実習の一部として行われている夜間診療実習の目標の達成度を評価し、今後の課題と教育方法について検討した。学生の実習記録の記述内容を分析対象とし、質的に分析した結果、外来における看護者の役割については多くの学生が捉えられていたが、対象の生活上の問題や健康管理に関する対象理解については視点が乏しく記述数も少ないことが明らかとなった。今後、対象理解が深まったり広がったりするよう、実習前オリエンテーションで成人期の特徴や健康を阻害する要因、健康の判断に影響する要因や受診に関係する要因について学習し、実際に実習の場で、生活や日常の健康管理行動について対象にどのように聞いていくのか具体的にイメージできるようにしていく必要性が考えられた。また、各々の学びを共有できるよう、可能な限り実習後に学生カンファレンスの時間を設けるよう工夫していく。

Key words：成人看護学実習 (nursing practicum of adult nursing), 外来 (outpatient unit), 看護学生 (nursing student)

はじめに

三年次の領域別実習における成人看護学実習は、成人看護学実習Ⅰ（以下成人Ⅰ）と成人看護学実習Ⅱ（以下成人Ⅱ）で構成されている。さらに成人Ⅱでは、病棟実習のほかに成人看護学Ⅱ-②実習（以下成人Ⅱ-②実習）として、夜間診療実習と透析室実習のうちいずれかを実習することとなっている。

成人看護学実習では、実習目的を「あらゆる健康状態の成人期にある対象の特徴を理解し、対象に応じた看護実践のための知識・技術・態度を習得する」としており、その下位目標である成人Ⅱ-②実習の目標は、「外来、透析室での看護援助を理解できる」としてい

る。さらに①外来、透析室において看護者の果たす役割を考えることができる、②対象の生活上の問題を考えることができる、③病を抱えながら社会生活を送る対象の健康管理について学ぶことができる、の3つの具体的目標を示している。医療の進歩や高齢社会などから、病棟実習では高齢者を受け持つ学生が多い。一方、夜間診療実習では成人期にある対象とかわることが多く、さらに社会生活を営みながら外来受診する対象とかわることができるため、成人看護学実習としての学びが多いと考え、短い時間ではあるが実習を実施している。今回は、学生の記録から実習目標の達成度を評価し、今後の教育方法について示唆を得ることを目的とする。

夜間診療実習の方法

A病院で週2回行われている夜間外来の受診者に対して、来院時から問診、診察、検査、会計を終えるまでの過程を付き添い、見学実習を行っている。対象となる患者は、まず担当教員が定期受診以外の患者または新患を選定し、その患者に実習内容を説明した上で承諾を得ている。承諾が得られた場合に、再度学生が実習目的の説明や自己紹介を行い、実習を開始している。多くの学生が1回の実習で2～3名の患者に付き添い、実習時間は原則として16時30分から20時である。実習終了後、学生は所定の実習記録用紙に「実際に見学・実習した内容および考察」を記録し、実習翌日までに担当教員に提出する。学生の記録用紙は、担当教員が実習施設に郵送し、外来看護師がコメントして返送することとしている。

尚、学生が夜間診療実習と透析室実習のうちどちらの実習をするのかについては、教員が4月にあらかじめ振り分け、成人Ⅱ-②実習配置表を学生に提示している。

目 的

学生の学びから夜間診療実習の目標の達成度を評価し、今後の教育方法について示唆を得ることである。

方 法

1. 分析対象

平成21年度成人Ⅱ-②実習において、夜間診療実習を行った18名の実習記録用紙の記述内容。

2. 分析方法

記述内容から、学びとして「学生の考えたこと・感じたこと」を表している文脈を一塊として抽出し、データ化した。データとするかどうかは成人看護学の5名の教員で検討した。次に、抽出したデータを具体的目標の①外

来において看護者の果たす役割を考えることができる、②対象の生活上の問題を考えることができる、③病を抱えながら社会生活を送る対象の健康管理について学ぶことができる、に関連している学びとそれ以外の学びに分類した。ただし、②と③は明確に分けることが難しいため生活や健康管理に関する対象理解として一つにし、①、②③、その他の3つに分類した。そして、それぞれの分類ごとにデータを解釈し、関係性をみながらサブカテゴリー化し、生成された複数のサブカテゴリー間の関係性を吟味しつつ生データに立ち返りながら包括的にまとめ、カテゴリーを生成した。生成したカテゴリーとサブカテゴリーの関係性を再度吟味しながら修正を行った。また分析結果の妥当性を高めるため、分析は成人看護学教員5名で合意が得られるまで繰り返し検討を重ねた。結果をもとに夜間診療実習の目標の達成度を評価し、今後の教育方法について検討した。

3. 倫理的配慮

実習成績の評価が全て終了した平成22年1月に、口頭で本研究の目的や結果を公表すること、研究への協力は自由意志であり協力しないことによる不利益がないこと、プライバシーの保護に対する配慮などについて説明し、研究への協力の同意を得た。

結 果

1. 夜間診療実習における学生の学びの記述

夜間診療実習を行った18名の学生の実習記録から、学びを示す総記述数は101であった。分析の結果、「外来における看護者の果たす役割」に関連した記述数は43、「対象の生活上の問題や病を抱えながら社会生活を送る対象の健康管理に関する対象理解」に関連した記述数は26、「その他」の学びの記述数は32であった。

以下に、それぞれについて学生の記述を引用しながら説明を加える。文中の【】はカテゴ

りー, “ ”はカテゴリーの説明, []はサブカテゴリー, < >は学生の記述を示す。

2. 外来における看護者の果たす役割

学生が捉えた看護者の役割に関するカテゴリーは、【患者の状態把握と診療の補助】、【セルフケアに向けた指導・説明】、【全ての患者に対する気配りと対処】、【他職種との連携】であった。表1に分析で得られたカテゴリーとサブカテゴリー、記述数の一覧を示す。

1) 【患者の状態把握と診療の補助】

このカテゴリーの記述数は15であった。学生は、“外来看護者は幅広い知識をもとに患者の状態を的確に判断するとともに、診療が円滑に進むよう細々とした準備や患者への配慮、医師との連携を行う役割がある”と捉えていた。

〔診察を円滑にするために診療補助を行ったり医師と連携したりする〕では、診察を円滑にするために外来看護者は、問診やカルテの準備、診察や処置の準備や介助、患者の誘導など先のことも考えながら診療の補助を行うことが大切であると捉えていた。たとえば、<患者さんの情報をパソコンに入力したり、カルテを医師が見やすいように並べたりすることは、診察がスムーズになされるようになるためにとても大切な看護師の役割である>や<忙しい中病院に通ってきている方や体調が悪い方もいるため、少しでも時間を短縮して患者さんの休める時間が多く取れるように、予診だったり、採血や点滴の準備を早く行うなど看護者として行えることを予測して行動し、患者さんの負担にならないように医師と連携を取りながら援助を行っている>と記述されていた。

〔知識や経験をもとに情報収集し判断する〕では、外来には色々な方が来院されるため、外来看護者は幅広い知識や経験をもとに短時間で情報収集して状態を判断し、適切な援助に結びつけていく事が大切であると捉えていた。たとえば、<外来に来る患者さんはいろいろ

表1 看護者の役割

カテゴリー	サブカテゴリー	記述数
患者の状態把握と診療の補助	診察を円滑にするために診療補助を行ったり医師と連携したりする。	10
	患者が納得して治療を受けられるよう説明したりねぎらう。	1
	知識や経験をもとに情報収集し判断する。	3
	問診から患者の状態を判断する。	1
セルフケアに向けた指導・説明	患者が医師の説明を理解しているか確認する。	1
	患者が自ら健康管理できるよう指導する。	7
	診察の機会を利用して疾病予防の指導も行う。	1
	患者が負担なく療養生活を続けられるようかかわる。	2
	患者・家族の入院前後の生活の変化を考えてかかわる。	1
全ての患者に対する気配りと対処	患者を思いやり態度に注意して患者が安心感を持てるようにかかわる。	5
	姿勢・態度に注意して患者が思いを表出しやすいようにかかわる。	4
	待っている患者に配慮する。	3
	待っている患者や治療を受けている患者の状態も観察し、対処する。	3
他職種との連携	受付や会計との連携を図る。	1
総記述数		43

んな症状を持って来るため、外来看護師は幅の広い知識を持ち、あらゆる疾患や病態を想定して質問をしていく能力も必要である>や<看護師は、受診理由を聞いて、そこからさらにどんなことが必要なのか予測したり緊急性を判断していた>と記述されていた。

2) 【セルフケアに向けた指導・説明】

このカテゴリーの記述数は12であった。学生は、“外来看護師は患者が自らの健康に関

心を持って健康管理できるように指導したり、患者が負担なく療養できるようにかかわることが役割である”と捉えていた。

〔患者が自ら健康管理できるよう指導する〕では、看護師は、患者の健康管理に対する意識や理解を高めたり、患者の生活に合わせた指導を行うことで、患者自ら健康管理ができるようにすることが大切であると捉えていた。たとえば、〈成人期は、薬の管理は自己管理ができる年齢層にあるため処方時に看護師が十分にわかりやすい説明を行い、忘れずに内服していただくような関わりが重要である〉や〈働き盛りの人にとって自ら健康管理していくためには、その人の仕事内容やいつ何をできるのか時間で生活を細かく見て・・・その人ができそうなことを、できる時間も見ながら一緒に考えていくことが大切〉と記述されていた。

3) 【全ての患者に対する気配りと対処】

このカテゴリーの記述数は15であった。学生は、“看護師は、患者にとって安心・納得できる診察となるように、患者の状態や状況を見ながら細々としたところまで気を配り、対応していく役割がある”と捉えていた。

〔患者を思いやり態度に注意して患者が安心感を持てるようにかかわる〕では、看護師は患者が安心して診察が受けられるように患者の立場に立って考え、姿勢や態度にも留意しながらかかわることが大切であると捉えていた。たとえば、〈患者と対面している時に看護師は、その方の目線に姿勢を合わせ、相手の顔や目を見て話すようにしていた。そのことが患者にとって、きちんと自分と向き合ってくれるという安心感と、話を聞いてもらえることによる不安の減少につながる〉や〈看護師は患者さんの気持ちに寄り添い、声掛やこれから行うことについての簡単な説明だけでも行うことで、患者さんの不安は少しでも和らぐのではないかと。看護師は、病院に来ている患者さんがどのような思いでその場にいるの

かを考えながら対応することが必要〉〈看護師の対応が患者さんの安心感や病院という空間に対する不安感に影響を与えるのではないかと考える。できるだけ患者さんの不安を緩和しつつ、安心して受診してもらうために、できるだけ足を止め患者さんに向き合いつつ、十分な説明を行っていくことが大切なのだろう〉と記述されていた。

また、〔姿勢・態度に注意して患者が思いを表出しやすいようにかかわる〕では、看護師は、短時間のかかわりの中でも患者が気持ちや思いを表現できるような姿勢・態度でかかわることが大切であると捉えていた。たとえば、〈短時間の中でもいかに患者さんの思いを受け止め（情報を得る）、また、患者さんも言いたい事や聞きたいことが話せるよう忙しい中でも歩くペースを緩めて患者さんに笑顔で語りかけたりする態度で接することも大切である〉や〈困っていると感じたら声をかけたり、呼び止められたら笑顔で丁寧に対応していくことが大切だ〉と記述されていた。

4) 【他職種との連携】

このカテゴリーの記述は1であり、看護師は受付や会計との連携を図ることも必要であると捉えていた。

3. 対象の生活上の問題や病を抱えながら社会生活を送る対象の健康管理に関する対象理解

学生が捉えた対象の生活上の問題や健康管理に関するカテゴリーは、【社会的役割の遂行が健康を妨げる要因となる】、【健康に対する意識が健康管理行動を左右する】、【セルフケア能力がある】、【治療していくには支えが必要】であった。表2に分析で得られたカテゴリーとサブカテゴリー、記述数の一覧を示す。

1) 【社会的役割の遂行が健康を妨げる要因となる】

このカテゴリーの記述数は15であった。学生は、“対象は生活中心で、職場や家庭での

表2 対象の生活上の問題や健康管理

カテゴリー	サブカテゴリー	記述数
社会的役割の遂行が健康を妨げる要因となる	健康の事よりも仕事や家庭のことを優先しがち。	6
	仕事を休むことを申し訳なく思う。	2
	受診のしづらさから疾患の早期発見と治療の継続が困難となる。	3
	病気があっても中心は生活。	1
	罹患や受診は役割の遂行や生活に影響を及ぼす。	3
健康に対する意識が健康管理行動を左右する	健康に対する意識が生活や受診に影響する。	1
	仕事や生活に影響があると実感しない限り健康に対する意識が低い。	3
	異常なデータを知ることが生活改善のきっかけとなる。	1
セルフケア能力がある	自分なりに病気を理解しながらセルフケアしようとする。	3
	治療について自ら考え自己管理している。	1
治療していくには支えが必要	治療していく上で周囲の支えや理解が大切。	1
	楽しみや生きがいは生きる原動力になる。	1
総記述数		26

役割遂行を優先する、あるいは優先せざるを得ない状況にあり、それが時には健康を妨げる要因にも繋がっている”と捉えていた。

〔健康の事よりも仕事や家庭のことを優先しがち〕では、対象が社会的役割の中心であることから、その役割遂行を一番考えている傾向があると捉えていた。たとえば〈職場での役割だったり、母親であることの役割がある場合に、役割を果たすことが一番になってしまい自分の体調面などが二の次になってしまう〉や〈家庭のある一家の大黒柱的存在である方(特に男性)にとっては、やはり仕

事が生活の中心で自分の健康についてしっかり考えられている人は少ないのではないかと記述されていた。

〔受診のしづらさから疾患の早期発見と治療の継続が困難となる〕では、対象が社会的役割を遂行しようとする中で受診がしづらい状況となり、受診を先延ばししたりして重症化したり、治療の中断に繋がったりするのだと捉えていた。たとえば、〈社会的責任と役割のために安易に仕事を休めないことが考えられ、自然と受診率も下がってくる。・・・受診率が下がることによって、疾患の発見が遅れたり疾患が慢性化したりすることにつながる〉と記述されていた。

2) 【健康に対する意識が健康管理行動を左右する】

このカテゴリーの記述数は5であった。学生は、“対象は、何か役割遂行や生活に影響が生じたり異常な検査結果を目の当たりにしたりしないと、健康に対して中々意識が向かない状況にある、その一方では自分の健康に対して意識するようになると健康管理行動も変わってくる”と捉えていた。たとえば、〈今までに大きな病気にかかったことがあったり、持病があるといったように健康について考えるような動機がない場合や若い方というのは自分の健康に対する意識というのはいやいや〈自分の身体に苦痛や不快感など症状がおこらず仕事に影響がない限り、病気や自分の健康について重要視していない〉と記述されていた。

3) 【セルフケア能力がある】

このカテゴリーの記述数は4であった。学生は、“対象は、「自分なりに病気や治療について理解しようとし、受け止め、セルフケアしようとしている」と感じ取り、また、「セルフケア能力もある」と捉えていた。たとえば〈成人期の人々はセルフケア能力が高く、自宅では病気に対して自分で対処することがほとんどである。自ら書籍やインターネット

から疾患に関する情報を得ることもでき、病気に対する理解度も高い。病院に来て、診察を受けることも自分の健康管理の選択の一部である）やく病を抱えながら社会生活を送っている患者さんは、辛いことも多くあったが、どこかで自分なりの方法で病気について受け止めており、自分ができる健康管理を行っている」と記述されていた。

4) 【治療していくには支えが必要】

このカテゴリーの記述数は2であった。学生は、“対象が治療していく上で、支えてくれる人や職場の理解、自分自身の楽しみや生きがいとなるものが必要である”と捉えていた。たとえば、く患者さんは、病気を抱えているからといって暗くなって外にでないということではなく、病気を抱えているなかでも自分の好きなことを見つけて、それを生きがいとして生活を送っていた。写真について楽しそうに語ってくれた患者さんを見て、生活のなかに楽しみがあるということは、生きる原動力にもなる」と記述されていた。

4. 実習目標に関連したこと以外の学び

学生は、夜間診療実習を通してそれぞれの視点で実習目標に関連したこと以外にも観察したり感じ取ったり、考えたりしていた。これらの学生の学びを分析して得られたカテゴリーは、【外来患者の精神的特徴】、【夜間外来の意義】、【外来待合室の環境】、【病院スタッフの役割】、【医療者にとっての夜間外来のメリット・デメリット】、【問診の意義】であった。表3に分析で得られたカテゴリーとサブカテゴリー、記述数の一覧を示す。

1) 【外来患者の精神的特徴】

このカテゴリーの記述数は2で、学生は、“受診に訪れる患者は、体調不良であることや不慣れた病院の環境・診察などから不安になったり心細く感じたりしている”と捉えていた。たとえば、く病院という環境は普段の生活空間とは全く異なり、とくに慣れていない方にとっては新しい環境に加え、どんなことを

表3 その他の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	記述数
外来患者の精神的特徴	受診に訪れる患者は不安や心配を抱えている。	2
夜間外来の意義	ライフスタイルに合わせて受診時間を選択できる。	2
	仕事への影響が少なく受診でき、健康管理しやすい。	5
	生活に影響が少なく、安心して通院できる。	2
	就労者は仕事に影響が少ないため受診しやすい。	5
	同医師による継続治療が受けられ安心できる。	1
	昼間の診療費と差がなく受診できる。	2
外来待合室の環境	待ち時間が有意義に過ごせるような工夫をする。	2
	待ち時間が苦痛なく過ごせるような工夫をする。	2
	待ち時間に健康の意識付けができるような工夫をする。	1
	外来の掲示物は来院者へ知識を提供する手段の一つ。	1
	快適な待合室の環境は安心感や好感を与える。	1
病院スタッフの役割	患者・家族の不安の軽減・信頼関係の構築のため、きめ細かい配慮・説明をする。	1
	患者が話しやすい雰囲気を作る。	1
	患者が仕事と健康管理を両立できるよう診療時間を配慮する。	1
医療者にとっての夜間外来のメリット・デメリット	医療者には診療報酬加算のメリットと仕事量増加のデメリットがある。	1
問診の意義	患者の状態把握ができる。	1
	患者の状態や対処の必要性をアセスメントする場になる。	1
総記述数		32

されるのかという不安や、怖い医師ではないかという心配などから緊張感が強くなる」と記述されていた。

2) 【夜間外来の意義】

このカテゴリーの記述数は17であった。学生は、“夜間診療があることで、仕事や生活に支障を来たすことなく受診でき、支障なく受診できるから受診しやすく健康管理もしやすい”と捉えたり、“夜間診療は、昼間に受診できる患者と診療費に差がないため、経済的な負担が多くなることなく平等に医療を受けられる”と捉えていた。

〔仕事への影響が少なく受診でき、健康管理しやすい〕では、就労者が昼間受診することは仕事に影響するため難しく、中々受診行動に繋がらないことがあると考え、夜間診療により就労者は受診しやすく健康管理ができるのだと捉えていた。たとえば、〈仕事を抱えつつ生活している人にとっては平日の日中に病院に来ることは難しく、仕事時間を削りにくい夜間外来には受診しやすいのだろう。夜間外来があるからこそ、仕事を行っている人も比較的受診しやすく、この事により忙しい中でも病院に受診できるということは、仕事をしている人たちの健康を守り、増進する要因になるのではないかと〉や〈仕事が忙しくなると中々昼間に受診することは難しくなる。そうなると、身体状況(現在の状態)が悪化し、疾患を患ったり、薬を内服している人にとってはそれが中断されるため継続した治療が不可能になってくる。そのため仕事が忙しく受診が中々できない成人期の方にとっては、週2回の夜間診療はなくてはならないものだ〉と記述されていた。

〔昼間の診療費と差がなく受診できる〕では、昼間働いていて受診しづらい患者にとって、夜間診療は時間外請求されることなく、昼間の受診者と同じように受診できる利点があると捉えていた。たとえば、〈夜間外来でなく、時間外だと医療費の請求が多くなってしまうことを考えると、夜間外来では時間外請求をされない分、経済的負担も少ないといった面もあり、経済的な面でも果たす役割は大

きいのではないかと〉と記述されていた。

3) 【外来待合室の環境】

このカテゴリーの記述数は7であった。学生は、患者や家族が待ち時間を過ごす待合室の環境についても目を向け、“待合室は単に受診を待つ場所ではなく、患者の苦痛や不安を軽減できるよう配慮したり、知識を深めたり健康意識を高められるように情報提供するなど、工夫された場である”と捉えていた。たとえば、〈ロビーには、新聞、テレビ、パンフレット、張り紙などがあり、待ち時間を有意義に過ごせるとともに様々な情報を得ることができる〉や〈受診時の待っている時間を利用してテレビやパンフレットからこのような情報がとれることで健康への意識づけができるため、外来において重要なことである〉と記述されていた。

4) 【病院スタッフの役割】

このカテゴリーの記述数は3であった。学生は、看護師だけでなく医師や病院スタッフ全体の役割についても目を向け、“皆が患者のためにきめ細やかな配慮をする必要がある”と捉えていた。たとえば、〈外来では、初診の方ももちろんいらっしゃるのですが、病院のスタッフが一人ひとり心がけて、初めての人でもスタッフに話しかけやすく、意見の言いやすい雰囲気を作ることは大切である〉と記述されていた。

5) 【医療者にとっての夜間外来のメリット・デメリット】

このカテゴリーの記述数は1で、学生は“夜間外来は、医療者にとって診療報酬が加算されるメリットと、仕事量が増えるデメリットがある”と捉えていた。

6) 【問診の意義】

このカテゴリーの記述数は2で、学生は、“問診は、患者の状態が即座に把握できる場であったり、状態把握だけでなく、対処の必要性についてアセスメントする場にもなる”と捉えていた。

考 察

1. 夜間診療実習の目標の達成状況と今後の課題

1) 外来における看護者の果たす役割について

一般的に外来看護師の役割として、診察に必要な情報収集や検査の説明、診察が安全・安楽に受けられる環境作り、医師へ患者の思いを伝えるための仲介、セルフケアや在宅療養を支援するための説明や継続的指導、多職種との連携・共同があると言われている¹⁻³⁾。これらは、【患者の状態把握と診療の補助】、【セルフケアに向けた指導・説明】、【全ての患者に対する気配りと対処】、【他職種との連携】、に集約されていると考えられ、学生全体として見れば外来における看護者の役割が捉えられたと言える。個別に見ると、カテゴリーの【患者の状態把握と診療の補助】、【セルフケアに向けた指導・説明】、【全ての患者に対する気配りと対処】、についてはそれぞれの記述数が12~16であり、多くの学生が捉えられたが、【他職種との連携】については記述数が1であり、ほとんどの学生が捉えられていなかった。

外来で学べる他職種との連携として、病棟・他外来・検査室・受付や会計窓口・他施設等との連携がある。しかし、A病院の夜間外来は内科単科であること、実習時間が短い上に夕方であること、2名程度の患者につき添う実習方法であることなどから、これらの連携について学べる機会は少なく、他職種との連携を全ての学生が学ぶことを目標とすることは難しいと考える。したがって、この点については学生全員が学ぶことを目標とせず、学べた学生がいた時に、学生カンファレンスなどで共有し、共通の学びにつなげていくことができるように考えていきたい。

また、今回の学生の記述の特徴として、患者の目線で外来看護を考えている記述が非常

に多いことが挙げられる。これは、来院から会計終了までの過程を患者につき添い、患者の体験を共有しながら思いや考えを聞いていくことを通して、学び得たことであると考えられる。看護者として、患者の心理を理解し、患者の立場に立って看護を考えることは重要であり、この実習方法は有効であったと考える。

以上のことから、目標は達成され、特に今後の実習方法や教育方法の変更などについて検討すべき課題はないと考える。

2) 対象の生活上の問題や病を抱えながら社会生活を送る対象の健康管理に関する対象理解について

外来利用者への付き添い体験によって学生は、健康問題を抱えて生活している生活者としての理解を多様に学べたとする報告がある^{4,5)}。しかし、対象の生活上の問題や健康管理に関する学びの総記述数は26で、看護者の役割に関する記述数に比べかなり少なかった。

【社会的役割の遂行が健康を妨げる要因となる】については、多くの学生が捉えていた。その理由として、夜間診療の利用者は青年期・壮年期にある患者が多いことや、問診から付き添わせていただくために、継続治療で定期受診している患者ではなく、体調不良などを理由に受診した初診の患者や定期受診以外の再診の患者を受け持つことが多いからであると考えられる。青年期や壮年期にある患者は、家庭や社会において中心的な存在である。特に働き盛りの男性は会社での責任も大きい一方で一家の大黒柱として、また育児や家事全般を行う母親は家庭の中心として、それぞれに重要な役割を担っている。身体的には健康に自信があり、ある程度の無理が利く年代でもあるため、役割の遂行を優先しがちな状況も多いと考える。したがって、そのような状況にある患者から受診理由や経過を聞いていく中で、自然と情報が取れ、“対象は生活中心で、職場や家庭での役割遂行を優先する、あるいは優先せざるを得ない状況にあり、それ

が時には健康を妨げる要因にも繋がっている”と多くの学生が捉えられたのだと考える。

【社会的役割の遂行が健康を妨げる要因となる】以外のカテゴリーについては記述数が2～5と非常に少なかった。その理由としても、前述した対象の特徴が影響していると考ええる。持病があり、定期的な受診が必要な患者であれば、その疾患に結び付けて患者の生活を聞いたり、セルフケアの状況やその能力について意図的に情報収集したりしやすいのかもしれない。しかし、青年期や壮年期の患者は学生にとってとても健康的に見え、その人の生活上の問題や日々の健康管理について何をどのように聞いていけば良いのかイメージしにくかったことが考えられる。

夜間診療実習は、病棟実習と違い成人期にある対象とかわることが多く、成人期にある対象の特徴や、成人看護の意義について理解を深められる良い機会である。前述したような対象であっても、成人期における身体的・精神的・社会的特徴や健康を阻害する要因、健康の判断に影響する要因⁶⁾、医療機関を訪れるかどうかに関係する要因⁷⁾などについて事前に学習し、患者の生活や日常の健康管理行動についてどのように聞いていくのかを具体的にイメージして実習に臨むことで、対象理解を広げることは十分に可能であると考ええる。したがって、来年度の実習では対象は変えず対象理解が幅広くできるようにすることが課題である。

3) その他の学びから

【夜間外来の意義】については、夜間外来を利用する受診者の特徴や対象患者との会話からほとんどの学生が自ずと考えられたのだと考える。

また、【外来患者の精神的特徴】、【外来待合室の環境】、【病院スタッフの役割】については、患者に付き添うことで、患者の体験していることや思いを共有し、患者の目線で必要な援助を考えた結果であると考ええる。学

生が患者に付き添い見学実習を行うことで、患者の立場に立って患者の心理を理解し、必要な看護についても患者の視点から考えることができたとする報告がある⁸⁻¹¹⁾。看護をしていく上で、患者の立場に立って考えられることは重要である。その点で、看護のニーズを患者の立場から理解できるこの実習方法は効果的であると考ええる。

その他の学びも含めて、多くの視点からの学びがあったことは評価したい。今後は、これらを個人の学びとするのではなく、学生カンファレンスなどで共有することで学生全体の学びにつなげていきたい。

2. 今後の方向性

1) 実習方法について

成人期にある対象と多くかわることができ夜間診療実習は、成人期の特徴や成人看護の意義について理解を深められる実習であり、さらに、患者の立場に立って援助の必要性を考えられていたことから、大変有意義であったと考える。しかし、他職種との連携や継続看護についての学び、対象の生活上の問題や健康管理に関する対象理解については学びが少なかった。今後学生に対して、対象理解が深まったり広がったりするよう、実習前オリエンテーションで成人期の特徴や健康を阻害する要因、健康の判断に影響する要因や医療機関を訪れるかどうかに関係する要因について学習させ、実際に実習の場において、対象に生活や日常の健康管理行動についてどのように聞いていくのか具体的にイメージできるようにしていく必要がある。

他職種との連携や継続看護については、短い実習時間の中で全員が学ぶことは難しい状況にある。しかし、学べた学生がいれば、それを発表しあい共有することで、共通の学びとすることは可能であると考ええる。したがって、これらを含めたそれぞれの学びを共有できるよう、可能な限り実習後に学生カンファレンスの時間を設けるよう工夫していく必要がある。

2) 実習時期について

夜間診療実習を行っている成人Ⅱ-②実習は、成人Ⅰを終了した学生が、成人Ⅱの実習前あるいは実習後に行っている。これは、成人Ⅰを通して学生のコミュニケーション能力やアセスメント力などが向上し、短時間のかかりの中でもその場での対応が学生なりにできることも期待している。曾谷ら¹²⁾は、臨地実習前後の学生の特性の変化について調査し、実習後は自己他者ともに肯定する割合が顕著に増加し、状況に応じて自分を変化させられる力である透過性調整力が上昇した、と報告している。実際、実習で初対面の患者に付き添い、話している姿勢や実習記録から、患者の話を受けとめながらその場に応じた対応ができていくように感じられる。外来実習を通して学んだことをさらに病棟実習で生かすためには、成人Ⅱの実習前に行うことが理想であるが、現実的には難しいところもあり、現状を続けていくことが妥当であると考えられる。

研究の限界

本研究は、分析対象が学生の実習記録であり、学生が記録として表現したものだけを分析している点で限界がある。

おわりに

夜間診療実習では、短い実習時間であるにもかかわらず学生は多くの学びを得ていることから、有意義な実習であったと考える。しかし、課題もいくつか明確となり、今後は本研究の結果を生かし、学生の学びを深められるようにしていきたい。さらに、外来実習での学びを、病棟実習での入院前と退院後の生活を踏まえたより深い対象理解や、継続看護を意識した看護に生かしていけるようにしていきたい。

謝 辞

実習記録を分析対象とすることに快く承諾

して下さった学生の皆さん、夜間外来で学生が付き添うことを了承して下さった受診者の皆様、実習を受け入れ色々配慮して下さった実習施設の職員の皆様に感謝いたします。

文 献

- 1) 清水久美子, 荒井美智子: 第1章 外来看護の役割と業務, 成果を上げる外来看護取り組みガイド, 日総研出版, 名古屋, 2007, pp.8-17.
- 2) 日総研グループ編: 第1章 外来看護の専門性を追及する, 変わりゆく外来看護, 日総研出版, 名古屋, 2000, pp.8-90.
- 3) 田中克子, 梅津美香, 小田和美, 北村直子, 兼松恵子, 奥村美奈子ほか: 成熟期看護学実習の外来実習と透析室実習でとらえた「看護」の比較. 岐阜県立看護大学紀要, 4(1), 133-139, 2004.
- 4) 松山洋子, 黒江ゆり子, 松下光子, 坪内美奈, 米増直美, 藤澤まこと: 外来診療利用者への付き添い体験からの学生の学び. 岐阜県立看護大学紀要, 3(1), 62-68, 2003.
- 5) 中田芳子: 外来看護実習での学生の学び. 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集, 15, 22-32, 2005.
- 6) 波多野梗子, 小野寺杜紀: 第3章 看護の対象 C.保健・受療行動. 基礎看護学〔1〕基礎看護学概論, 医学書院, 東京, 2005, pp.87-92.
- 7) 同上, pp.87-92.
- 8) 秋山千恵子, 久保かほる, 鈴木妙, 柴崎いづみ, 浅見多紀子, 鈴木夕岐子ほか: 看護学生の外来・検査・治療部門の見学実習での学び. 埼玉医科大学短期大学紀要, 19, 23-31, 2008.
- 9) 小田和美, 田中克子, 北村直子, 梅津美香, 兼松恵子, 奥村美奈子ほか: 成熟期看護学実習の外来実習において学生がと

- らえた「看護」－目標達成像からみた実
習方法の課題と方向性－. 岐阜県立看護
大学紀要, 3(1), 95-101, 2003.
- 10) 前掲, 成熟期看護学実習の外來実習と透
析室実習でとらえた「看護」の比較.
133-139.
- 11) 前掲, 外來診療利用者への付き添い体験
からの学生の学び. 62-68.
- 12) 曾谷貴子, 長江宏美, 太田栄子, 影本妙子,
新見明子, 登喜玲子ほか: 看護学臨地実
習前後における学生の特性の変化. 川崎
医療短期大学紀要, 26, 23-28, 2006.